

アンドレ・ブルトン『通底器』における 夢の記述の一読解の試み（Ⅰ）

泉 谷 安 規

はじめに

本稿は、アンドレ・ブルトンの作品の一つである『通底器』（1932）を取り上げ、第一章に収められているブルトン自身の夢のテキスト、その夢解釈について考察を加えるのが目的である。

冒頭に5編の夢のテキストが収められている『地の光』（1923）の例に見られるように、ブルトンの夢の記述の試みはごく初期の段階から認められている。また、ブルトン以外のシュルレアリスト——デスノス、クノー、レリス——なども夢に対し大いに関心を寄せていて、当時のシュルレアリスムの機関紙『シュルレアリスム革命』は、そうした多くの書き手たちの夢のテキストによって毎号のように飾られていた。シュルレアリストたちにとっては、夢はそこから新たな可能性を豊富に掘り出すことのできる鉱脈だったのである。以下、少々迂遠ではあるが、『通底器』のテキストに直接触れる前に、そもそもシュルレアリスムにとって夢とはどういう意味を持ち、またどういう位置づけをされていたのかを確認することから始めたい。

Ⅰ-1. シュルレアリスムにとって夢とは何か

そもそもその出発点において、ブルトン以下のシュルレアリストたちにとっては、「シュルレアリスム」とは、それまでの既成概念の文学の枠から大いに逸脱した、いわゆる文学—外（*extra-littéraire*）的な「実験」を意味するものであった。それが以下の三つの試み、すなわち「自動記述」、「夢の記述」、そして「睡眠実験」である。ところが、ここで奇妙なことに気づかされる。将来の効果を大いに期待され試みられたこの三つの実験は、そもそもの出発点からさまざまな試行錯誤を強いられ、開始早々すでにして、どうやら破綻の兆しを呈していたように受け止められていたようである。その痕跡が読み取られるのが「霊媒の登場（*Entrée des Médiums*）」（1922）と題されたテキストである¹⁾。これは、ルネ・クルヴェル、バンジャマン・ベレ、そしてロベール・デスノスが被験者となり、催眠状態、一種の睡眠状態に入った彼らに、そこに居合わせた参加者がいくつか質問をし、被験者がそれに答える、といった、19世紀末にヨーロッパ全土で流行をきわめた、心靈実験、霊媒体験を模した試みであり、その実験の様子を報告した短いテキストであるが、冒頭にはこうある。

あるおもいがけない操作、つまり私たちが半ば閉じた眼をお互いの上に注ぎながら、それについての論争が忘れられることを予断すらできないでいた何かが、かつてその周囲に集合する必要のなくなっていた途方もない蒸気仕掛けのブランコを、ふたたび始動させたところである。ほぼ二年前、あの奇妙なブランコが働きを止めてしまったときには、かなり激しく四方八方へと投げ出されずにはいなかったものの、私たちは多かれ少なかれ思い通りに、正気を取りもどそうと努めていたのだった。(O.C. I, p.273. 下線部分強調引用者)

詩的比喩と、複雑な構文が入りまじって非常に分かりづらい、いかにもブルトンの文章であるが、まず確認しておかなければならないのは、冒頭に出てくる「あるおもいがけない操作」から「何かが」までが、この睡眠実験のことを指し、強調部分の「蒸気仕掛けのブランコ」とは、プレイヤッドの編纂者マルグリット・ボネによれば、「自動記述」をさす隠喩であるとのことである²⁾。このブルトンの言葉を信ずるなら、1919年にフィリップ・スーポーと共同で書かれた「自動記述」の試み『磁場』は、それが書かれるや否や、早くも一年そこそこで(引用にあるように「ほぼ二年前」)停滞していたことを意味している。そして、1922年9月25日のデスノスを中心とする、催眠実験によって、その活動が再び再開されたというのである。ここからも、「自動記述」と「睡眠実験」が密接な関係にあることが確認されるだろう。

周知のように、「シュルレアリスム」という語は、当初、「自動現象」と同義語であった。以下の引用は「霊媒の登場」からのものである。

私や私の友人たちが、シュルレアリスムという語で何を言おうとしているかは、ある程度まで知られている。(……) この言葉によって、夢の状態、すなわち今日その限界を定めるのがすこぶる困難な一状態と充分に呼応するような、ある種の心の自動現象 (un certain automatisme psychique) を指示しようという点で、私たちは意見の一致を見てきた。(O.C. I, p.274)

ここで言及されている「シュルレアリスム」という語の定義は、二年後に発表される『シュルレアリスム宣言』(1924)で再び取り上げられ、そしてそこで「シュルレアリスム」なるものがさらに明確化されている³⁾。ともあれ本来の意味での「シュルレアリスム」という語の定義の初出は、この「霊媒の登場」というテキストである。

さらには、「霊媒の登場」にはこうある。少々長いが、引用しよう。

《シュルレアリスム》に話を戻すなら、私はこのところ、はなはだ限定された人間的、文学的意志のもとにそれを置くことで、この領域へ意識的な要素を侵入させてしまうのは、それをますます稔りの少ない開発に委ねるに等しいと考えるようになっていた。私はそういうやり方を完全に捨て去った。これと同じ考えから、私は自分の関心のすべてを夢の記述 (récits de rêves) に向けようという気になり、とくに似たような様式化を避けるために、これを速記によって得ようと思いついていた。残念なのは、この新しい試みが記憶の助けを求めるということであつた、記憶というものはまことに消えやすいし、概して信用のおけぬものなのである。とくに数多くの特色ある文献が不足していたため、この問題はほとんど進展しないよ

うに思われた。したがって、第三の問題解決法（残るはこれを判読することだけだと信ずる）が提起されたとき、私はすでに右の側面から大したことを期待していなかったのだ。その解決法とは、失敗の原因の介入する余地がはるかに少く、それゆえもっとも胸ときめかしてくれる種類のものである。そのことについては、以来十日を経た今でも、私たちのうちでもっとも物に動じない人々、もっとも頼りにできる人々までが、感銘と不安に心を乱して、茫然としているという事実からも判断されよう。彼らは不可思議 (la merveille) の前で度を失ったといっても過言ではないのである。(O.C. I, pp.275-276)

この断り書きのあとで、クルヴェルによる交霊術の模擬実験、そしてデスノスによる「睡眠実験」の具体的な様子が報告されている。

ここで、一応、まとめてみよう。「霊媒の登場」の以上三つの引用から読み取れることは、1)「自動記述」、「夢の記述」、「睡眠実験」がそれぞれシュルレアリスムの活動として、内的に密接に関連していること、2) しかしながら、前者二つの試みは、すでになされているが、それぞれ固有の原因によって、何らかの支障や挫折を余儀なくされていること、3) 残された最後の試みに対して、特にブルトン自身、あまり期待してはいなかったことである。だが、ことはそう単純ではない。ここでは、この三つの試みに対して否定的側面ばかりが述べられているのではない。その証拠に、「霊媒の登場」のすでに引用したテキストの冒頭においては、それまで「ほぼ二年」停止していた、自動記述がこの機会に再び開始されたことはすでに確認した。また、三つ目の引用にあるように、「睡眠実験」は、それに参加した人物たちに「不可思議 (la merveille)」との遭遇を提供したとある。この「不可思議」なる概念は『シュルレアリスム宣言』以来、一貫して、シュルレアリスムがあらゆる形態のもとで追及していったものである⁴⁾。

とすれば、われわれが問わなければならないことは、以下のようなことであろう。初期シュルレアリスムの三つの支柱をなす活動は、シュルレアリストたちにとってはどのような意味をもっていたのだろうか。ましてや、開始早々、失敗と破綻の連続にもかかわらず、彼らはなぜこれらの実験を放棄しなかったのか。なぜそれほどにこだわり続けたのか。あるいは、こう言ってもいいかもしれない。これらの実験は、逆に、その失敗や破綻ゆえに、彼らを魅了していたのではなかったのか、と。

I-3. 「実践」と「理論」

これらの問題の根源は、『シュルレアリスム宣言』において提示された、「シュルレアリスム」の定義そのものに起因しているかもしれない。それを確認するために、もう一度、有名な定義を検討してみよう。

シュルレアリスム。男性名詞。純粋な心の自動現象 (Automatisme psychique pur) であり、それにもとづいて、口述、記述、その他のあらゆる方法を用いつつ (soit verbalement, soit par écrit, soit de toute autre manière)、思考の実際上の働きを表現しようとする。理性によって行使されるどんな統制もなく、美学上ないし道徳上のどんな気づきからも離れた思考の書き取り (Dictée de la pensée)。

百科事典。(哲)。シュルレアリスムは、それまでおろそかにされてきたある種の連想形式のすぐれた現実性や、夢の全能性や、思考の無私無欲な活動 (jeu désintéressé de la pensée) などへの信頼に基礎をおく。(O.C. I, p.328)

すでに引用した「霊媒の登場」においては、「ある種の心の自動現象 (un certain automatisme psychique)」と少々曖昧に残された部分「ある種の (un certain)」がここでは、より具体化されている。まず、根本にあるのは「心の自動現象」(ここでは「純粋な」という形容詞が付言されているが)である。さて、問題となるのは、その「心の自動現象」あるいは「思考」をいかなる形態で表現するかである。ここでは「口述」、「記述」、「その他のあらゆる方法」と三つの方法があげられるが、これらは先で言及した三つの実験に対応しているように思われる。単純に考えてみるなら、「記述 écrit」の部分は文字通り「自動記述 écriture automatique」、「口述 verbalement」は「睡眠実験」を指すと思われる。「自動記述」はあるイメージを出発点として、一人ないし二人の主体が、次々とわいてくる言葉をそのまま記述する、つまり思考を書き取っていく。また、「睡眠実験」では、催眠状態あるいは睡眠状態に入った被験者の口から出てくる言葉 (verbe) を、その場にいる参加者たちが書き取ってゆく。では、「夢」はどうだろうか。一見すると、夢を見た本人が、夢で見たイメージ、そこに出てくる言葉を書き取るのであるから、夢の「口述」にも「記述」にも当てはまるように思われる。しかしながら、後に見ていくように、「夢の記述」では、夢を見るのも本人、それを記述するのも本人、であるが、夢から送られてくるメッセージないし思考とそれを記憶すること、ましてや記述することとのあいだには大きな隔たりが存在している。周知のように、フロイトのいわゆる、「夢思想」と「夢内容」との間には心的規制が働いているために、目覚めた後に記憶される夢は「夢の作業 (travail du rêve)」によって大きく変形・歪曲されているからだ。「自動記述」は<自己>の思想の<自己>による記述、「睡眠実験」は<主体>の思想の<他者>による記述と、ここであえて単純に図式化すれば、「夢の記述」は<自己>の思想の<自己>による記述であると同時に、<自己>の思想の<自己>という<他者>による記述といってもいいだろう。夢においては、「思考」を書き取る主体が<自己>であるのか、あるいは<他者>となるかという、主体のステータスの問題が介在してくる。その意味では、夢においては「思考 (la pensée)」とその「書き取り (dictée)」とのあいだには、大きな距離が存在しているといえるだろう。そこに夢を扱う場合の基本的かつ最終的な困難がある。

先に、初期シュルレアリスムの行った三つの実験は、ことごとく失敗の連続であったこと、そしてそれにもかかわらず、シュルレアリストたち特にブルトンは、それらの実験を放棄することなく、その後も継続していったことを述べた。後年、第二次大戦後に受けたインタビューのなかで、当時を振り返ってブルトンは、以下のように述べている。1920年ころから22年にかけて行われたこれら三つの試みは「シュルレアリスムの前奏曲であった実験活動 (l'activité expérimentale)」期に属するものであって、『シュルレアリスム宣言』が発表された1924年から、「シュルレアリスムは理論的段

階へと入る (le surréalisme entre dans sa phase raisonnante)」⁵⁾ のであると。

とするなら、『シュルレアリスム宣言』というテキストの中で定義された「シュルレアリスム」なる語は、「実験 expérience」と「理論 théorie」との間をつなぐ架け橋の機能を果たすことになる。事実、これ以降、シュルレアリスムの活動は、「実験」あるいは「実践」と「理論」のあいだを揺れ動き、「実験」と「実践」を「理論化」しようと試みたり、あるいは逆に「理論」を「実践」へと移していく。さらには、両者の統合をはかろうとする⁶⁾。「自動記述」については、さまざまな変奏形態をとりながら、「溶ける魚」(1924) から最晩年の自動記述詩である『A音』(1961) までがその実作品の例であり、またそれを理論化・検討化する場としては、例えば「自動現象のメッセージ (Le Message automatique)」(1933) という重要なテキストがある⁷⁾。しかしながら、「睡眠実験」に関しては、被験者と参加者の命にかかわる事件や事故が続出したり、あるいはその他の支障があり、この実験そのものはこの時点で中止したという⁸⁾。「霊媒の登場」において、自動記述や夢の記述の挫折が述べられ、いわば残された最後の砦のように思われ、しかも「不可思議」を啓示してくれた、催眠、睡眠実験が、「実践」としては、最初に放棄されたというのは、なんとも皮肉な話であるが、繰り返しになるが、心の自動現象としての「第二の状態」の探索は以後も続けられることになる。では、夢については、どうだろうか。

I-3. 夢の理論化? : 『シュルレアリスム宣言』の例

では次に、夢は『シュルレアリスム宣言』において、いかに理論化されているかを見ていく。ここでは夢は、<自由 (la liberté)>、<狂気 (la folie)>、<想像力 (l'imagination)> などと同列に並べられ、積極的な高い評価を与えられている。これらはいずれもこの書の冒頭で、それまで論理や合理主義によって抑えつけられていた人間を解放する、いわばキーワードのような働きをはたしている。そのなかでも夢は、フロイトの名前をとともに言及され、「皮相な現実」(O.C. I, p.316) のくびきから解放するものとして、「精神の奥深いもの」(ibid.) を探求・開拓するのに貢献するとされている。

このあと、四項目に渡って、ブルトンの夢理論が展開されていくのだが、そこに見られる特徴としては、ブルトンにとって夢とは、「まとまった組織体の形跡をとどめており」(O.C. I, p.317)、そして際限のない絶対的な自由が夢に与えられていることである。『シュルレアリスム宣言』には以下のような記述がみられる。

昨夜みた私の夢は、おそらく一昨夜の夢に続いているだろうし、また、賞賛すべき正確さでつぎの夜の夢にひきつがれてゆくだろう。(O.C. I, pp.317-318)

夢をみている人間の精神は自分におこることにすっかり満足している。できるかどうかという不安な問いも、もう問われはしない。おまえの好きなだけ、殺すがよい、いっそう速く飛ぶがよい、愛するがよい。もし死んだところで、死者たちのあいだから目をさますという確信がもてはしないか？ みちびかれるまま

にしたまえ、出来事はおまえに延期されることをゆるさないのだ。おまえには名前がない。すべての物事の容易さは、はかりしれないほどである。(O.C. I, p.319)

特に後半の引用にある「おまえに好きなだけ、殺すがよい、いっそう速く飛ぶがよい、愛するがよい」の表現などは、クルヴェルやデスノスが睡眠実験の際に見せた反応、深層願望の現実化を想起させるが、ここから見ても、「夢」はそれを理論化し、解明される対象というよりも、先に挙げた〈自由〉〈狂気〉〈想像力〉と同じステータスにある、一種のスローガンであるような印象を受ける。

こうして「理論」そのものとして考えるなら、フロイトの名前が言及されているとはいえ、ここで展開されている「夢」の理論はいかにも粗雑で荒っぽいものと思われるだろう。この点については、このテキストが書かれた時点では、フロイトの『夢判断』のフランス語訳はまだ存在しておらず、ブルトンがフロイト理論について知ることができたのは、二・三の概説書を通してだけであったという事実がある⁹⁾。したがって『シュルレアリスム宣言』で夢について語られている事柄は、ここに見られるように、いささかの外れで、牽強付会な記述がその大半を占めている。フロイトがその夢理論で強調しているように、夢のイメージは心的規制が働いて検閲され変形をこうむっているために、無制約で絶対的な自由の発現というものはありえない¹⁰⁾。ここでは夢は、〈自由〉や〈狂気〉や〈想像力〉をいかになく発揮して書かれた詩のヴァリエーションのようなものとして顕揚されているといえよう¹¹⁾。

したがって、ブルトンが夢というものと本格的に正面からとり組み直すためには、1926年の『夢判断』のフランス語訳の出版をまたなければならなかった。フロイトの仏訳の発表とともに、ブルトンは夢の意味・機能についての徹底的な見直しを迫られ、かつフロイトの理論を詳細に検討する作業を開始する。そしてそれによって生み出されたのが、これから扱っていく作品『通底器』である。

II-1. 『通底器』その構成と背景

1932年に一冊の本として発表された『通底器』は、これと相前後する作品『ナジャ』(1928)、『狂気への愛』(1937)とともにブルトンの散文作品の主要な三部作をなしている¹²⁾。他の二著作同様、テキストには多数の写真やイラストが収められている。内容構成についていえば、大きく三つの部分に分けられる。作品の構成と当時ブルトンを取り囲んでいた状況は密接に結びついている。というよりもブルトンがその頃抱えていたさまざまなレベルの問題がこの作品を形成する要素となっているため、また本稿の目的であるブルトンの夢の分析にはぜひとも不可欠であるので、以下、その当時の状況を詳しく見ていくことにしよう。

まず、第一部はフロイトの『夢判断』についての批判的読解とブルトンの夢の紹介・分析にあてられている。これについては後で詳しく触れることにする。

第二部では、1931年4月5日から4月24日にかけてのブルトンの現実生活と各種の体験が報告されている。この時期、ブルトンとシュザンヌ・ミュザール(夢のテキストではXとして登場する)

との関係は最終的な破局を迎え、それが全ての発端となる¹³⁾。ミュザールを決定的に失ったことを自覚したブルトンは、その二人の関係の破局が社会的・経済的な理由によるのではないかと反省を加えてみるのだが、しかしながらそうした知的・現実的な対処だけでは心の決着がつかず、失意のあまり、覚醒とも夢幻状態ともつかぬ朦朧とした精神状態に陥り、絶望的な毎日を送ることとなる。そして、Xに代わる新たな愛の対象を求めるため、ネルヴァル的な日々の彷徨を続ける。自ら語るように、ブルトンは、「姿を消してしまった外的対象の代わりに、その対象が残していった空白をある程度まで埋めてくれるような別な対象を持つてくるというという、ばかげてはいるが、しかし直接的な誘惑」(O.C. II, p.151)を覚え、街で偶然であったドイツ人女性や16歳の少女の踊り子に魅惑されたり、カフェで手紙を書く女性と夕食を共にしたりする。

テキストにははっきり明示されていないが、恋愛といった個人的・感情的な次元以外でも、ブルトンはこの頃、大きな岐路に立たされており、それが『通底器』の陰鬱なトーンの基底をなしている。1929年の『第二宣言』に明確に反映させているように、シュルレアリスムはその初期のメンバーの幾人かを失い、思想的・政治的な立場から運動の建て直しを迫られていた。この転換期に、ブルトンを初めとする何人かのシュルレアリストはフランス共産党へ接近するが、党から得た反応はシュルレアリスムに対する悪意、とまではいかないまでも無理解、無関心だった。また、シュルレアリスムの内部においても、創立当初のメンバーであったアラゴンがシュルレアリスムを離れその批判者に変貌する、いわゆる「アラゴン事件」が起きている¹⁴⁾。

第三部は、こうしたことを受けた社会的・政治的省察に当てられている。革命の途を選択したシュルレアリスムについての今後の展開の可能性如何が議論の主題となっている。『通底器』にも反映されているように、ブルトンは、当時、マルクス主義的立場に接近しており、自らの立場を「弁証法的唯物論」とははっきり規定していた。しかしながら、その結果、ブルトンはそうした思想的・イデオロギー的立場と現実生活との齟齬乖離、対立に深刻に悩まなければならなかった。社会変革の実現ためには、「家族」や「愛」それに「芸術」を犠牲にしなければならないとする実践的革命家の主張にそのまま同調し、シュルレアリスムのそれまでの路線を変更するべきか(「愛」、「自由」、「詩」を犠牲にして放棄するべきか)、あるいはシュルレアリスムはそれらとは独立して独自の道を歩むべきか、等々。

本書には、こうしたシュルレアリスムの活動の方向性をも含めて、ブルトン個人の深い苦悩が本書に刻まれている。そもそもの本書の執筆動機は、こうしたジレンマを何とか解消したい、夢と現実、過去と未来、革命と愛、などを両立させたいというアンドレ・ブルトンの強い願望から出発している。そこに、この本の表題が由来している。

「通底器 (Les Vases communicants)」とは、錬金術で用いられる実験器具の名称で、試験管のようなものが容器の底でつながっているものを指している。つまり、この標題は、本書でそれぞれ扱われているテーマ「夢」、「愛」、「革命」が互いに排除するものではなく、奥深いところで通底し合っているのだというブルトンの信念の表明でもある。

シュルレアリスムは、あまりにも分裂している数々の世界、つまり覚醒と睡眠、外的現実と内的現実、理性と狂気、さめた認識と愛、生活のための生活と革命、等々に分裂している数々の世界のあいだに一本の導きの糸を投げかける以上のことは何も試みたことはない、とみなされることを私は願っている。(O.C. II, p.164)

これは明らかに『シュルレアリスム第二宣言』(1929)冒頭の有名な一節、「生と死、現実と想像、過去と未来、伝達可能なものと伝達不可能なもの、高いものと低いもの、すべてがそこから見るともはや矛盾したものとは感じられなくなる精神のある地点が存在するように思われる」(O.C. I, p.781)の書き換えであり、矛盾し相対するものが統一を果たす「精神のある地点」(Ibid.)へ到達したいという、本書の最終目的をあらわしている。と同時に、ある意味では、その限界を露呈するものとなっているだろう。というのもこの問題は、本稿のIで取り上げた、「実践」と「理論」の一致・統合と深く結びついた問題でもあるからである¹⁵⁾。

II-2. 夢の賭金

「夢は願望充足である」というフロイトの命題を全面的に受け入れながらも、『通底器』の第一部において、ブルトンが夢解釈から要求することは、心的活動の解明にとどまらない。それと同じ比重で(あるいはそれ以上に)ブルトンにとっては、夢はその解釈のあり方によって、解釈者の思想的・イデオロギー的立場を浮き彫りにする証言の場となっている。夢の自己分析に着手する前に、ブルトンは第一部の導入部においてかなりのスペースを割いて、フロイトの著作に倣って、その身振りをまねつつ、フロイト以前の夢の理論家たちを次々に検証していく。しかしながら、フロイトがもっぱら心理的・学問的領域において夢の理論家たちを検討していたのとは異なり、ブルトンは彼らを思想的・イデオロギーの法廷の場へ連れ出す。そこで追及されるのは、夢の解釈者たちが、「覚醒時の心的活動と睡眠時の心的活動を区別するのかわからないのか」(O.C. II, p.108)、夢の材料を現実世界に属するとするか、あるいはそれらは他の(超越的、神秘的、宗教的)領域からやってくるとみなすのか、また夢に〈時間〉、〈空間〉、〈因果律〉を認めているのか否か、等々である。いわば夢は、心的装置とイデオロギー装置としての二重の負荷を負わされているのだが、それによってブルトンの記述もかなりポレミックで攻撃的な調子を帯びている。「唯物論matérialisme」を断固として標榜するブルトンは、夢の材料に少しでも現実の要素以外のものを認める人々を、宗教家、神秘主義者、観念論者と激しく非難している。また、夢の時間と覚醒の時間とは全く別の性格のものだとする解釈者は二元論者と見なされて、ブルトンから激しい非難を浴びせ掛けられることになる。

フロイトもまた例外ではない。フロイトの夢解釈に関しては、ブルトンはその功績を大いにたたえているが、こと哲学的・思想的観点に関する批判は容赦がない。ブルトンは、フロイトが『夢判断』において自分の思想的・イデオロギー的立場を明確にしていない点を難詰しているが、思想家・政治家ならぬ一医学者にその責任を負わせようとするのは、いささか行き過ぎの感があるだろう。

「イルマの注射」の夢分析のさいに、フロイトが自分の性的欲望に言及することに躊躇を覚えて分析を中断したことをあげ、それが、立派な地位と家族を持ちそれを護ろうとするフロイトのブルジョワの態度の現れであると、ブルトンは断じている。

『通底器』全体を通してブルトンが範として仰いでいる哲学教科書は、主にレーニンの『唯物論と経験主義批判』であるが、夢に外的価値を接続しようとする操作はいささか強引であり、第三部で表明されているあからさまなソ連賛美とあいまって、この著作が今日の読者にとって抵抗を感じさせる原因の一つともなっているのではないだろうか。ともあれ、ブルトンによる夢の自己分析の試みは、そうした思想的・イデオロギーの問題、あるいは感情的・性的葛藤を徹底的に検討・解決しようとする強い意思のあらわれであることは間違いない。

では、次にブルトンの夢のテキストの検討とその分析に移っていききたいと思う。

(この稿続く)

註

アンドレ・ブルトンの著作からの引用は、特別な指示がない限り、André BRETON, *Œuvres complètes*, tome I, tome II, tome III, tome IV, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1988-2008に依拠しつつ、O.C. と略記し、引用箇所の末尾に巻数とページ数のみを付した。なお、引用に際しては、数種の既訳を参照させていただいたが、必要に応じて文章を変更したことがある。これは、以下の参考書についても同様である。またブルトンの伝記的記述については、以下の文献に負うところが多い。

Marguerite BONNET, *André Breton Naissance de l'aventure*, José Corti, 1988.

Henri BEHAR, *André Breton Le Grand Indésirable*, Calmann-Lévy, 1900 [アンリ・ベアール『アンドレ・ブルトン伝』塚原史・谷昌親訳、思潮社、1997]

Mark POLIZZOTTI, *André Breton*, Gallimard, 1999.

André BRETON, O.C. t. I と t. II の《Chronologie》の部分。

André Breton—La Beauté convulsive, Centre Georges Pompidou, 1991

- 1) 後に『失われた足跡 (*Les Pas perdus*)』(O.C. I, pp.273-279) に所収。初出は、*Littérature, nouvelle série*, n°6, 1^{er} novembre 1922 である。[邦訳、「霊媒の登場」巖谷國士訳、『アンドレブルトン集成6』、人文書院、pp.129-138]
- 2) O.C. I, p. 1304.
- 3) したがって、「霊媒の登場」と『シュルレアリスム宣言』との間には、ほぼ二年間の時間差があるのだが、後で検討するように、この時間的距離は大きな意味を持つてくる。
- 4) 「きっぱりいいきろう、不可思議 (le merveilleux) はつねに美しい、どのような不可思議も美しい、それどころか不可思議のほかに美しいものはない。」(O.C. I, p.319 [アンドレ・ブルトン『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』巖谷國士訳、岩波文庫、p.26])
- 5) *Entretiens*, O.C. III, p.484. [アンドレ・ブルトン『ブルトン、シュルレアリスムを語る』稲田三吉・佐山一訳、思潮社、1994、p.99] ついでに付け加えておくと、このインタビューの中で、ブルトンは、「自動記述」と「睡眠実験」の同一性は、それらが「第二状態 (états seconds)」(*ibid.*, p.476 et p.478 [同書、p.87, p.89]) の探求にあるとし、それが19世紀末から20世紀初頭にかけて催眠術やヒステリーの論争をめぐって活気を呈していた心理学、シャルコーやナンシー学派を参照していること、ひいてはフロイトの精神分析との関連性

をはっきりと語っている。

- 6) その意味においては、今日、独立した作品と見なされがちな『シュルレアリスム宣言』の執筆動機を考え合わせると興味深い。周知のように、この宣言は、ブルトンの「自動記述」作品群「溶ける魚」の序文として書かれたものである。それが、外的な要請（イヴァン・ゴルをはじめとする他の人物たちとの「シュルレアリスム」なる語をめぐる権利争奪戦）、さらには「シュルレアリスム」を理論化し、実験作品である「溶ける魚」を理論的に補完する必要性から、今日見られる形に膨らんでいったという経緯がある。これに関しては、M. BONNET, *op.cit.*, pp.323-324 および pp.328-337 に詳しい。
- 7) *O.C. II*, pp.375-392。後に『黎明 (*Point du jour*)』(1934) に所収。このなかで、ブルトンは「自動現象」の性格とその起源を再検討しており、イギリスの心霊学者 F.W.マイヤーズ (1843-1901) との親近性を示唆したり、ジュネーヴの心理学者 Th. フルルノフ (1854-1920) が観察記述した女性霊媒師 エレーヌ・スミット (この女性は、レオポルドという別人格を持っており、自分は古代インドの王妃とマリー=アントワネットの生まれ変わりであると称し、さらには火星語を話しその言葉を残している) を絶賛するなど、自動現象と心理学、催眠術、霊媒術、さらには心霊学などとの関連性を考える上で非常に興味深いテキストである。なお、Jean STAROBINSKI (≪ Freud, Breton, Myers ≫, *La relation critique*, Gallimard, 1970, pp.320-341) は、このブルトンのテキストをもとに、自動記述は先のマイヤーズの影響を受けそれを出発点としていると主張し、物議をかもしだしたことは有名である。これに対しては、マルグリット・ボネがすぐさま反論している (cf. *O.C. I*, pp.1123-1127)。いずれにせよ多くの問題をはらんだこの「自動現象のメッセージ」というテキストに関しては、いずれ稿を改めて論じてみるつもりである。
- 8) *Entretiens, op.cit.*, pp.482-484 [前掲書, pp.86-99]。概略を示せばこうである。催眠、睡眠実験がエスカレートしていくと、被験者であるデスノスやクルヴェルが自己あるいは参加者に対して危害を加える恐れがでてきたというものである。クルヴェルは自殺を企てようとし、デスノスは周囲の友人にナイフを持って襲いかかったり、深い睡眠状態に入ったまま目覚めなかったという。二人のこうした深層心理の奥に秘められていた願望の流出を抑えきれなくなったために、ブルトンはやむなく実験を中止したという。また、ペレの場合は、狂言で催眠状態に入ったふりをしたともいう。いずれにせよ、繰り返しになるが、これは「実験」としての中断であり、先の註7) で示したように、「理論」そのものとしては、自動現象と催眠との関連性についてはその後もブルトンの問題系のなかに深く刻み込まれ残されていく。
- 9) André BRETON, *O.C. I*, pp.1347-1348 にある編者の註を参照のこと。以下、フロイトの著作『夢判断』については、フランス語訳としては、a) Sigmund FREUD, *L'Interprétation des rêves*, traduit en français par I. Meyerson, nouvelle édition augmentée et entièrement révisée par Denise Berger, Presses universitaires de France, 1996 (以下、*I.R.M.* と略記)、b) Sigmund FREUD, *Œuvres complètes IV, L'interprétation du rêve*, PUF, 2003 (以下、*I.R.O.C.* と略記)、c) Sigmund FREUD, *L'Interprétation du rêve*, traduction inédite par Jean-Pierre LEFEBRE, Seuil, 2010 (今回は残念ながら時間の関係からこの仏訳を十分に参照することはできなかった) がある。日本語訳としては、d) フロイト『著作集2』高橋義孝訳、人文書院、1991 (以下、『夢判断』と略記)、e) 『フロイト全集4 夢解釈I』新宮一成訳、岩波書店、2007 (以下、『夢解釈』と略記) を参照した。
a) の仏訳は、1926年に *La Science du rêve* (夢の科学) のタイトルで出版されたフランス語初訳の全面改訂版である。ちなみに言うと、ブルトンが『通底器』において参照したのは、この改訂以前の版である。
- 10) 夢だけに限ったことではないが、例えば、『夢判断』には、次のような箇所がある。「彼ら〔学者たち〕は心的なるものの制約作用 (le déterminisme) を過小評価している。われわれの心的生活の中には自由勝手な、どうでもいいようなものはひとつもありません。(……) 例えば私が任意のある数を表象しようと思っても、それは不可能なのである。私が思いつく数は、私の瞬間的な意図とはたいした関係を持っていないような、私の中にあるいろいろの思想によって、はっきり必然的に規定されている (déterminé) のである。」(『夢判断』, p.423. *I.R.M.*, p.438, *I.R.O.C.*, p.567)
- 11) これに関しては興味深い事実がある。例えば、「自動記述」と「夢の記述」を同時に収録している『シュルレアリスム革命』誌 (1924-1929) では、前者は《Textes surréalistes》(シュルレアリスムのテキスト) と題

され、後者は《Rêves》(夢)として、別立てに分類収録されているが、内容・形式ともに、この分類の指示がなければ、どちらがどちらに属しているのか判別不可能なものとなっている。「夢の記述」に関しては、それを「分析」する補完的テキストがないかぎり、それは「自動記述」に限りなく近いもの、あるいはそれと同等のものとならざるをえない。こうした意味においても、この時点においてもまだ、シュルレアリスムの「夢の記述」は、フロイト的な解釈されるべき夢とは別な、いわゆる詩的作品としてとらえられていたことになる。Cf. *La Révolution surréaliste*, Jean-Michel Place, 1991 (réimpression)

- 12) 邦訳は、以下の2冊を参照させていただいた。アンドレ・ブルトン『通底器』豊崎光一訳、『アンドレ・ブルトン集成1』人文書院、1976。アンドレ・ブルトン『通底器』足立和浩訳、現代思潮社、1978。『通底器』を扱った代表的な研究書としては、以下のものがある。Jean GUILLAUMIN, 《Rêve, réalité et surréalisme dans la cure et ailleurs》, *Le Rêve et le moi*, PUF, 1979, pp.173-209。Jean BELLEMIN-NOËL, 《André Breton : Des vases trop communiquant》, *Biographies du désir*, PUF, 1988, pp.123-208。松浦寿輝, 「解釈」と「置換」——『通底器』あるいは反=解釈学の装置』、『謎・死・闕』、筑摩書房、1997、pp.54-78。いずれも有益な示唆に富んだ論考であり、参考にさせていただいた。
- 13) 本書の準主人公ともいべきこの女性、『ナジャ』の末尾にも登場するシュザンヌ・ミュザールについては、シュルレアリストにしてその研究者であるジョルジュ・セバックがほぼ決定的といってもいい書物を書いた。この書物の一番の目玉は、セバックがミュザールに直接インタビューを試みた証言が収められていることである。Georges SEBBAG, *André Breton L'Amour-Folie*, Jean-Michel Place, 2004。
- 14) 当時の状況と危機を迎えた共同体としてのシュルレアリスムの動向については、拙論「ある共同体の夢——1920年代のシュルレアリスム運動をめぐって」弘前大学教養部『文化紀要』第46号、1997、pp.59-74を参照していただきたい。また、「アラゴン事件」に関しては、そのいきさつを論じたブルトンの自身のテキスト『詩の貧困』(O.C. II, pp.3-45)、フランス共産党への参加の是非については、*Adhérer au Parti communiste ?*, Gallimard, 1992の文献がある。
- 15) この点に関しては、いささか唐突ではあるが、以下のジョルジュ・バタイユのシュルレアリスム批判が根本的 point に触れているといつてもよいだろう。といつても、このバタイユの文章は、1929年にブルトンとバタイユが直接論争した頃のものではなく、第二次大戦直後、いわば二人が和解の兆しを示しだした頃のものであるだけ、いっそう説得的に思われる。「アンドレ・マッソン」(1946)と題された短いテキストのなかで、バタイユはこう言っている。「シュルレアリスムの芸術(文学表現と同様に絵画表現も)は、思考を表現することを目的にしている。だがシュルレアリスムが定義する思考は、世界からまさに離脱(dégagé)しているように見える。シュルレアリスムの芸術には、間違いなく停滞がある。芸術のための芸術の空しさから出たシュルレアリスムの芸術は、行動に仕えることもできなければ、統一性(totalité)を形成することもできずにいる。この芸術は、人間の領域の一部分しか表現していない。それだから、シュルレアリスムのなかには草創期から二つのまったく別の要素が識別できたのだ。一つは、空しい自由(無垢、自動現象)の要素で、これは、最終的に単調になり無力になってしまった諸作品のなかに表現された。もう一つの要素は、この空しい自由を生きる存在によってこの空しい自由の意味を全面的に肯定するというものであった。シュルレアリスムの活動が統一性の価値を持つようになるためには、外部から作品に知的な判断が付け加えられ肯定されるということが必要なのだ(Un jugement intellectuel, surajouté, affirmé du dehors)。」(下線部強調引用者)ここでバタイユが問題視していると思われるのは、まず第一に、『シュルレアリスム宣言』の定義において、ブルトンが「思考の無私無欲な活動」へ全面的な信頼を置いてしまったことであり、バタイユにとっては、それがいかに新しく「無垢」な行為(「自動現象」という新たな可能性の発見)であるとはいえ、それが「世界からの離脱」と映った点である。さらに悪いことには、シュルレアリスムはこの「無垢」さ、あるいは言いかえるなら「空しさ」を埋めるために、後から「外部から作品に知的な判断を付け加え」それを「肯定」しようとしたことである。この後付の「知的な判断」とは、シュルレアリスムの「理論化」の操作に他ならないだろう。さらにバタイユはこう付け加えている、「だがシュルレアリスムは論証(discours)なしでやってゆくことはできなかつたし、本質上いかなる意味からも逃げてゆくものの意味を肯定的な知的判断によってしっかり表明しておかねばならなかつた。アンドレ・ブルトンが見て取らなかつたこと(少な

くとも語らなかったこと)は、原則として袋小路から抜け出ることにはできないということだった。その袋小路とは、知性による肯定を超え出るものに、知性による肯定が付け加えられると、知性の外部にあるというそのものの本質は消し去られてしまうという困難のことだ。とすれば、シュルレアリスムは定義される以前にしか存在しなかったと語る(ジャン・ヴァールの発言だ)のは正しいことになる(……)。後半の「知性」に関するくだりは、非常に複雑で難解だが、要するに、矛盾・相反するものを統一するというという困難な営みは、知性や論証によって肯定や断言することはそれほど簡単ではないこと、むしろ知性と論証の限界を知りつつそれにいかに対処すべきか、というバタイユの思想がここで表明されているものと思われる。Cf. Georges BATAILLE, 《André Masson》, in *O.C. X I*, Gallimard, 1988, pp.35-40 [邦訳、ジョルジュ・バタイユ、「アンドレ・マッソン」、『ランスの大聖堂』、酒井健訳、ちくま学芸文庫、pp.114-129。一部訳文を変更した箇所がある]